

【論文題目】

環境世界を創造する人びと  
——沖縄・石垣島におけるパインと社会的承認——

廣本 由香

## 【論文の目次】

第1章	パインと人の社会的承認	4
1.1.	パインと人のコミュニケーションと生活	4
1.1.1.	パインの普遍的価値と意味喪失	4
1.1.2.	人とモノの関係	5
1.2.	社会的承認と環境の視点	8
1.3.	「少数者の共同性」の複数性	9
1.4.	石垣島という「場」	11
1.4.1.	島嶼社会の地理的文化的な周辺性	11
1.4.2.	移民を受け入れる「合衆国」	14
1.5.	移民二世の生活史	16
1.5.1.	名蔵・嵩田地区の歴史と自然環境	16
1.5.2.	移民二世の生活史	18
1.6.	本論文の構成	20
第2章	人間学としての承認論	23
2.1.	なぜ人は社会的承認を必要とするのか	23
2.2.	三つの承認形式と尊重欠如	24
2.2.1.	「愛」の承認	25
2.2.2.	「法」の承認	26
2.2.3.	「連帯」の承認	26
2.3.	アイデンティティの複数性	28
2.4.	小括——自己アイデンティティと自己実現の問題を捉える社会的承認	30
第3章	パイン産業の移動と展開	33
3.1.	世界のパイン生産と歴史——植民地主義と交易	33
3.2.	大日本帝国のパイン生産と歴史——南進と台湾統治	35
3.3.	石垣島の台湾移民によるパイン生産と歴史	37
3.3.1.	戦前の台湾人によるパイン缶詰製造	37
3.3.2.	台湾人への排斥行動と排除	39
3.3.3.	戦後のパイン産業の成長と縮小	40
3.4.	小括——パイン缶詰産業と移民の関係	42
第4章	パイン缶詰産業と台湾系の社会的承認	44
4.1.	パインと台湾系の関係	44
4.2.	台湾移民への社会的排除	45
4.2.1.	台湾移民の困難経験	45
4.2.2.	台湾人にたいする社会的排除と権利の剥奪	46
4.2.3.	パインによる土地の価値転換	48

4.3. 生活を変えたパイナップル——生活再建と生活破綻の経験.....	49
4.3.1. パイナップルの種苗増殖と生産拡大.....	49
4.3.2. 「パイナップルショック」と生活破綻.....	51
4.4. パイナップルから離れた経験——自立した農業と生活実践.....	52
4.4.1. 無国籍の台湾人.....	52
4.4.2. 承認されない台湾人と自立した農業.....	53
4.4.3. 石垣島で生産されるパイナップルの価値.....	54
4.5. 小括——パイナップルによる歴史的・文化的な自己理解.....	55
第5章 生果パイナップルと農家の社会的承認.....	60
5.1. 不安定な身分の台湾人.....	60
5.1.1. 苦難の時代を生き抜いた第一世代.....	60
5.1.2. 戦争と台湾移民.....	61
5.1.3. 種苗増殖とパイナップルブームの前兆.....	62
5.1.4. 華やかな「パイナップルブーム」.....	63
5.1.5. 台湾人にたいする「いじめ」.....	65
5.2. パイナップルに向けられる意気——生産規模の拡大に邁進.....	66
5.3. パイナップル農家の危機的な状況——パイナップル缶詰産業の縮小過程.....	67
5.3.1. 止められない時代の流れと負の連鎖.....	68
5.3.2. 交錯する加工離れと生果の出現.....	69
5.3.3. 時代の流れの最後尾に乗る.....	70
5.4. パイナップルの「価値転換」——個人のパイナップルの「おいしさ」が認められるまで.....	72
5.4.1. 「おいしさ」を追究するパイナップル農家.....	72
5.4.2. 生果に向けた「島本1号」.....	73
5.4.3. 「おいしさ」の発見と試行錯誤.....	76
5.4.4. 組織ではなく個人のパイナップルを目指す.....	77
5.4.5. 「おいしさ」と収量の両立不可能な関係.....	79
5.4.6. 環境が映し出されるパイナップル.....	80
5.4.7. 「貧弱」な土地から生み出される「おいしさ」.....	81
5.5. 小括——パイナップルによる土地の価値転換とパイナップル農家として自尊心.....	82
第6章 「へんなパイナップル」の社会的承認.....	84
6.1. 宮古島から来た「へんな」.....	84
6.1.1. 宮古島での困窮生活.....	84
6.1.2. 生活基盤を求めた移住と農業.....	85
6.1.3. 多量生産者としての自尊心.....	86
6.1.4. 土地所有の自己尊重.....	88
6.2. 「変わり者」の若者.....	90
6.2.1. 「やまんぐう」の少年.....	90
6.2.2. パイナップル農家になりたくなかった青年.....	92

6.3. 「石垣島パイン生果組合名蔵」の設立.....	94
6.3.1. 個人の能力が認められない組織.....	94
6.3.2. 価値共同体がつくる「本物」.....	96
6.3.3. 「おいしさ」を守る共同.....	97
6.4. 「へんなパイン」に表れる個性.....	98
6.4.1. サトウキビとの関係で捉える自由と自立.....	98
6.4.2. 「へんなパイン」に現れる個性と共同性.....	99
6.4.3. 墓に表現したパインと自己.....	101
6.5. 小括——自己を表し、個性を構成する「へんなパイン」.....	102
第7章 環境世界の創造.....	104
7.1. パインの自己アイデンティティと自己実現の問題.....	104
7.2. パインの社会的相互作用によって形成される「少数者の共同性」.....	109
7.2.1. 「少数者の共同性」の回路.....	109
7.2.2. 社会的承認における地域の自然と環境世界.....	111
参考文献（五十音順）.....	113
初出一覧.....	127
謝辞.....	127
付記.....	127

## 【論文の要約】

### 論文の目的

#### 問題の背景——生活世界の植民地化

現代社会では、パインアップル（以下、パイン）はグローバル企業の Dole や Del Monte によって熱帯地域のプランテーションで大量生産され、大型コンテナで輸入されるようになった。大概の人びとのあいだでは、遠く離れた熱帯地域で生産されるパインも、都市部のスーパーマーケットやコンビニで販売・消費されるパインも、同一のパインとして認識されている。いづどこにいても手軽に食べられる、それが日本社会で共有されるパインの普遍的価値である。

しかし、パインの普遍的価値の浸透の裏返しで生じる意味喪失は、ユルゲン・ハーバーマスが「システムによる生活世界の植民地化」（ハーバーマス 1981=1987: 319）と呼んだ文化の困窮化を生じさせる。大量生産／大量消費システムのなかでは、パインと人の相互行為やパインを介した人と人との相互行為は匿名化され、生活世界から切り離されて技術化される。そこには、パインを介して一人ひとりがかけがえのない存在として他者と出会い、コミュニケーションをとおして互いの自己を表現し、個性を形成し合いながら構成する相互主観的な世界はない。

こうした生活世界の植民地化にたいして、本論文で論じるのは、特定の地域の特定の人びとによるパインとのコミュニケーションや生活世界によって、パインの価値は決して同一に現れることはなく、特別な意味が生成されるという議論である。

#### 論文の問いと答え——沖縄・石垣島の移民二世にとってパインとはいったい何であるのか

本論文は、沖縄・石垣島の移民二世にとってパインとはいったい何であるのかという問いを立て、その問いを紐解く視野を開くものである。先に問いにたいする結論から述べると、彼らにとってパインは、自立した生活を支える自己アイデンティティや「少数者の共同性」を形成するものであり、パイン生産による土地の価値転換やパインの価値づけによって、条件不利地域から自らの環境世界を創造するものである。

本論文では、彼らの自己アイデンティティや自己実現の問題にたいする理解の柱として、アクセル・ホネットの承認論で取り出される三つの承認形式と尊重欠如を補助線にした「社会的承認」という概念を導入する。社会的承認は、人間が生きていくうえで他者によって認められて受け入れられる経験をどれほど必要としているのかという洞察がその土台にあり、人間が社会のなかで存在がまるごと愛されること、等しく認められること、差異がきちんと評価されること、総じて他者から認められて存在が受け入れられることを求めた生活実践や生き方を把握する視点である。

本論文のなかで社会的承認から検討していくのは、単に人間と人間の関係を主題化する社会的承認のみならず、自らの環境世界への社会的承認である。それは地域における環境の定義の獲得と言い換えることもできる。社会的承認において環境の視点の検討が求められるのは、私たちが生きる社会は、モノ＝自然（物）を必要とし、利用・管理し、意味を与える人間と環境の関係で成り立ち、こうした有意義な関係性が網の目のように連関した環境に社会は適応し、それを変化させているからである。さらに、本論文では人間とパインの関係を、人間と自然の関係から捉えるだけでなく、人間とモノの関係として捉えることで、自然（物）の移動という

視角も組み込むことができ、パインの移動によって創造される地域の自然や環境世界にまで視野を広げることが可能となる。

本論文の調査対象地である石垣島は、八重山諸島のなかでも移民を送り出すというより、移民を受け入れてきた島嶼として大きく歴史を展開してきた。先祖代々暮らしてきた人びとと、多様な社会的な背景やルーツをもつ移民が集って文化や社会をつくってきた島嶼ゆえに「合衆国」（三木 2010）といわれてきた。本論文では、地理的文化的な意味で「周辺」に位置づけられる名蔵・嵩田地区で暮らす移民二世3名の生活史を取り上げる。なぜ特定の移民二世を対象にしたのかと言えば、「(社会的に存在を否定されているような感じ)」（ホネット 2000=2005:106）を抱いてきた彼らにとって、パインが自己アイデンティティや自己実現の問題と関係し、自立した生活の維持・存続にかかわるものとして生活史と密接に結びついているからである。

彼らの生活史では、社会共同体の構成員として法的に認められずに尊厳が傷つけられた経験や集団的特性から差別やいじめを受けてきた経験、地域共同体のなかで変わり者や浮いた存在として疎外感を抱いてきた経験が語られる。このように地域共同体から不当な承認を受けたり、承認が歪められてきたりした一方で、移民や後続世代は社会が直面した危機的状况に対して、その時その時でパイン生産を発展させてきたことで、地域共同体から社会的承認を得てきた。こうした社会的承認によって、自立した生活に欠かせない自己アイデンティティを形成・維持し、人生を豊かにする自己実現に向かって進んできた。ただし、同じ地域の移民二世とはいえ、自己アイデンティティの自己決定は同一ではなく、パインとのコミュニケーションや生活世界によって、石垣の台湾系、パイン農家、「へんな」というようにアイデンティティの自己決定は異なり、こうした個々人の差異から自己を表現し、個性を築いている。

また、本論文では「少数者の共同性」として台湾ネットワークの共同性と栽培の共同性、生産出荷組合の共同性を示した。「少数者の共同性」は、強い共同意識に支えられて強固に関係づけられる単一の多数者の共同性ではなく、社会状況や問題の認知によってパイン生産を発達させる課題への認識や解決に向けての行動が異なるように、複数存在した。ここで付け加えて言えることは、いずれの「少数者の共同性」もパイン生産の発達から地域を発展させようとする共同性に変わりはないということである。

さらに彼らの生活史では、適地適作の観点から、パインによる土地の価値転換やパインの価値づけへの生活実践をとおして、地域に付された否定的な自然や風土、歴史に対する見方を転換して自らの環境世界を創造していた。ジョージ・ハーバート・ミードの「自我であるためには、人は共同体の成員であらねばならない」（ミード 1934=1995:201）という視点に立ち返れば、創造された環境世界で、自己と地域の肯定的な関係を築き、自己の社会的な存在価値を生み出している。

本論文では、パイン産業史の陰に隠れてきた一人ひとりの生活史を社会的承認によってすくいあげることによって、パインを文化や歴史、地域資源へと成長させた、移民や後続世代の生活実践や生き方を示すことができた。このように生活史のなかで発達してきたパインは、石垣島の移民や後続世代にたいして、過去の尊厳毀損の経験やアイデンティティが脅かされる不安定な状況を打ち破り、未来に向けて自由で自立した生活を送れる力を与えてきた。それゆえに、パインは生活世界の保存や社会的・文化的な自己理解にもかかわるものとして存在し、現在では地域社会の文脈に広く開かれることで石垣社会を語る象徴の一つとなったといえる。

本論文は、沖縄研究のなかで、石垣社会という多様な社会的な背景やルーツをもつ人びとが

生きる「<sup>フィールド</sup>場」から問題を発し、「生の実存」(関 2018: ii)の視点から生活史を取り上げて自己アイデンティティや共同性を示すことによって、標準化・規範化された沖縄の語り方を変えることにつながった。それは、日本社会の多様性を参照するための沖縄ではなく、沖縄自体の多様性や複雑性を語ることにつながり、多元的な社会を描き出すことに成功したということである。

## 各章の要約

### 第1章 パインと人の社会的承認——特定の地域の特定の人びとにとってパインとはいったい何であるのか

第1章では、パインと人の関係性を捉えるために、人とモノの関係を論じてきたアクターネットワーク理論(ラトゥール 1999=2007)やモノの社会史(天野・桜井 2003)、モノ研究(鶴見 1982; 村井 1988 ほか)の方法を検討する。そのうえで、単に人とパインのネットワークや関係性だけでなく、コミュニケーションや生活世界からパインに与えられた特別な価値や意味、その相互主観的な世界を捉えるために、環境社会学的なモノ=自然(物)の視点を導入する。

環境社会学は「人間社会の研究するにあたって、社会的・文化的環境に加えて、自然的環境との相互的な関係を不可欠と判断している点において特徴的」であるといわれてきたように(飯島 2001: 4)、社会学が得意とする人間と人間の関係性にくわえ、モノ=自然(物)を必要とし、利用・管理し、意味を与える人間と社会のかかわりようを捉えて説明してきた。本論文ではコミュニケーションや生活世界に焦点を当てるうえで、パインを「人間に外在しつつ人間の営為や思惟を表出させる人間化された自然」(関 2003: 58)として捉えていく。「人間化された自然」とは、人びとに外在しつつも自然の中に文化型を表出させるという意味で、きわめて人間的であり、社会的な性質を有するものであるという見方である(関 2003)。つまり、パインとのコミュニケーションは、「人間化された自然」との相互行為、ひいては共生関係と言い換えることができる。こうした意味世界が現出するパインとのコミュニケーションや、パインによって構成される生活世界を起点にしてみえていくことで、一般的にはパインはたんなる刹那的に消費される対象であるが、特定の地域の特定の人びとにとって、パインは「客観的抽象概念としての自然ではなく、地域社会の行為や文化、歴史を映し出す具体的なもの」(関 1997: 46)として出現する。

また、本論文のなかでパインに注目するにあたり、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環境世界 Umwelt」(ユクスキュル・クリサート 1934=2005)が示すように、誰もが身近な自然(物)を同じように認識しているとは限らず、その認識世界は絶対的ないし客観的なものではないという視点は重要となる。さらに、環境世界は自己の主観的な世界だけでなく、コミュニケーションや生活世界によって再構成される相互主観的な世界でもあるということは付け加えておく必要がある。それゆえに、同じ地域共同体の人間であっても、パインとのかかわりの過程で育まれた風土や文化によって、環境世界は独自の現れ方をすることが十分にあり、その独自性は自己アイデンティティや共同性、生活史にも反映する。

さらに本論文では、パインの社会的相互作用によって形成される「少数者の共同性」を明らかにする。従来の沖縄研究における地域の共同性を分析した研究の多くは、地縁・血縁あるい

は字（公民館）にもとづく社会関係や集団性にかんするものであった（例えば、山本 2004）。地縁・血縁から沖縄の社会的な特性を論じる研究は、地縁・血縁にもとづく共同性が沖縄社会の根底に横たわり、人びとの生活に作用してきたことを明らかにしてきた。こうした沖縄の共同性を地縁・血縁のつながりとして把握し、自明視してきた先行研究にたいして、近年では岸政彦がジェンダーや階層格差という視点を導入することによって沖縄的な共同性を捉え直している（岸 2014; 岸 2016）。沖縄研究に足りなかった「沖縄社会の内部にも多様な裂け目や亀裂」（岸 2016: 63）や「沖縄内部の差異化・構造化」（安藤 2013: 301）の視点を導入することで、沖縄研究が自明視してきた研究視角を批判的に捉え直している。

こうした「沖縄内部の差異化・構造化」（安藤 2013: 301）の研究視角を含みつつ、本論文では沖縄内部でも沖縄島とは差異化される石垣島において、その内部世界で地理的文化的に「周辺」に置かれた人びとのあいだで、パインの社会的相互作用によって形成される「少数者の共同性」に注目する。通常、多数者の共同性は「〈生の共約可能な commensurable 要素〉を特定化することによって成り立つ」（似田貝 2001: 44）。他方で、大多数の共同性に対置される「少数者の共同性」は、エスニック・マイノリティや障害者、生活困難者などの属性をもつ社会的弱者に作り上げられる共同性の意味で用いられる（田中 2010: 76-77）。ここでは、地域の中心的な集合性を表す公民館（字）や、血縁・地縁ネットワークにもとづく大多数の共同性にたいして、「周辺」の社会移動や社会状況の変化に応じながら、流動的に構築されるという意味で「少数者の共同性」を用いる。本論文では、全体を一つとする大多数の共同性ではなく、「少数者の共同性」が地域に複数存在し、それらが緩やかに連帯したり、連帯しなかったりすることが、石垣島における異なる共同性のあり方や地域のあり方であることを提示する。

## 第2章 人間学としての承認論——社会的承認とアイデンティティ

第2章では、現在、最も包括的に承認論を展開するアクセル・ホネットの議論をおさえる。ホネットは人間の実践の多様な領域を包摂する承認論を展開するにあたり、初期ヘーゲル哲学やミードの論考に依拠して三つの承認形式を取り出す。三つの承認形式とは、第1に「愛」、第2に「法」、第3に「連帯」であり、以下の図表 2-1 のように定式化される。ホネットは、三つの承認のあり方を組み合わせることで、あらゆる社会闘争は「承認をめぐる闘争」として解釈できると論じる。

本論文では、人間の「善き生」を可能にする社会的条件として提示された三つの承認形式と、承認によって得られる尊厳や自己アイデンティティを傷つける尊重欠如を補助線に、社会的承認という視点を獲得する。社会的承認では、人間を法的な権利や人権で保障される普遍的な存在として捉えるのみならず、親密な他者と愛し合う特別な存在、さらに社会生活のなかで価値を生み出す個別的な存在として包括的に把握する。社会的承認は、他の主体から承認されるという肯定的な経験からではなく、承認を拒まれるという否定的な経験への問いかけから始めることで、承認の尊重欠如の経験を克己する生活実践や自己変容（生き方）のダイナミズムを捉えることが可能となる。



図表 2-1 承認関係の形式

承認様式	(1) 情緒的気づかい	(2) 認知的尊重	(3) 社会的価値評価
人格性の次元	欲求と情動の性質	道徳的な責任能力	能力と特質
承認形式	原初的關係 (愛・友情)	法的關係 (権利)	価値共同体 (連帯)
発達の潜勢力	—	一般化・実質化	固体化・平等化
実践的自己関係	自己信頼	自己尊重	自己評価
尊重欠如の形態	虐待・暴力的抑圧	権利の剥奪・排除	尊厳の剥奪・卑め
脅かされる人格性の構成要素	身体的統合	社会的統合	「名誉」・尊厳

出典：ホネット (1992=[2003]2014: 175)

### 第3章 パイン産業の移動と展開——どのようにパインは生産されてきたのか

第3章では、先行研究からパイン産業の展開を整理することで、パインが世界各地で生産されるようになり、戦前期に日本統治下にあった台湾から石垣島に移動して生産されるようになった来歴や伝播をおさえる。こうしたパインの歴史的経緯から、パインの植民地的作物としての性格をおさえる（岩佐 1984；小那覇 2000；カオリ 2013=2015；中村 2016a；中村 2016b；中村 2016c；北村 2014；八尾 2018 ほか）。

パインは、15世紀末に西インド諸島でコロンブスによって発見されて以降、大帝国の交易や植民地経営によって熱帯地域で栽培が普及した。大規模な産業としての端緒は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ハワイでパイン缶詰製造の基盤が整えられ、アメリカ資本によって大産業が築かれたことにある。他方で、日本統治期の台湾でも台湾総督府や日本資本が中心となってパイン缶詰製造が進められ、産業として展開した。1930年代には、台湾総督府や日本資本によって推し進められた一連の工場統合によって、パイン缶詰産業は日本資本に独占されることになったため、地元の台湾人業者は廃業あるいは新天地を探さなくてはならない状況に追いやられた。こうして台湾人事業者は石垣島で廃村状態にあった名蔵・嵩田地区をパインの生産地とし、パイン缶詰製造を始めた。したがって、世界のパイン産業が植民地経営の観点から考えられ、パインも植民地的作物として捉えられてきたように、石垣島におけるパイン缶詰産業の端緒も、南進や植民地経営の地続きにあったと理解できる。

けれども、戦前期の帝国日本では、「沖縄人の序列は、『内地人』の次であり、その後に『朝鮮人』と続き、『台湾人』が最下位」で「沖縄人は、日本人であり、朝鮮人・台湾人とは違う」（又吉 1990: 262）という差別意識が流れていたこともあり、石垣島のなかで先進的な農業を展開した台湾移民にたいして、地元住民の排斥行動や社会的排除が起こった。このような石垣島のパイン産業史の移動と展開から見えてきたパインと移民の関係は、第4章以降の生活史の社会的な背景としても必要不可欠であり、名蔵・嵩田地区の移民や後続世代の尊厳毀損の経験やアイデンティティが傷つけられる経験に通じる歴史である。

#### 第4章 パイン缶詰産業と台湾系の社会的承認——パインとは何であるのか

第4章では、台湾移民二世の島田長政さん（1945年生）の生活史を取り上げることで、島田さんにとってパインとは何であるのかを明らかにする。

戦後、台湾人は地域共同体からの社会的排除や差別を受け、権利剥奪や尊厳毀損の経験をしてきた。その一つに、石垣市による台湾人の未開拓原生林への半ば強制的な移動があげられ、島田さんはこれを隔離措置と捉えていた。こうした不安定な社会状況のなかで、島田さんの父親である廖見福（1913-1967）はパインの種苗増殖と栽培、缶詰製造を再生し、戦後のパイン産業の礎を築いた。パイン産業史のなかで、廖はパイン缶詰産業の土台を築いた功労者として語られる。しかし、こうしたパイン産業史の功績の裏で、島田さんの生活史では急激なパイン産業の成長のなかで「俺の家は急成長して、急没落したんだな（笑）。家は差し押さえをくらったんだよ。俺は中学校までは御曹司、高校時代は急下降」したことが語られる。このように廖や家族はパイン缶詰製造をめぐる産業の急成長に翻弄されて犠牲を払った人たちでもあった。

高校卒業と同時に独立して農業を始めた島田さんは、台湾人という理由でさまざま社会的な弊害を受けた。島田さんが「（農協のなかで）俺はいじめられたと思うさ」と語るように、金融公庫等の公的資金が使えず、通常の営農支援が受けられなかったりした。また、農協で資金を借りようとしても信用外で高利子を課せられたりするなどして、農業をするにも困難が付きまとった。さらに、1960年には日本政府によって121品目輸入自由化が決定され、他の品目に比べていち早く1961年に生果パインが自由化された。ただし、石垣島ではパイン缶詰産業は成長過程にあり、新たにパイン生産を始める農家がいても、島田さんのように「ダメな時代がくるから」とパイン生産に見切りをつけてやめる農家は少なかった。島田さんの「ダメな時代」とは、行政からの交付金や補助金を前提としたモノカルチャー的な農業体制のことである。こうして島田さんは「良いものをつくっても一色端にされる」モノカルチャー的な農業からは距離を置くようになり、行政や農協の公的機関に頼らずに、個人の能力で自立した農業を考えるようになった。

しかし、パイン生産から離れた現在でも、島田さんは「パインと歩み続けてきた」とパインへの思い入れの強さを語るように、生活史では島田さんとパインの関係が続いている。島田さんにとって、戦前に台湾移民によって石垣島に持ち込まれ、戦後も台湾人を中心に栽培や製造の基礎がつけられたパインは、石垣島の産業や経済、地域生活を支えてきたという社会的承認が得られるものであり、台湾系としての自己アイデンティティを自己決定する根拠であった。パインは、台湾系の地域共同体との社会的・歴史的なつながりでもあり、台湾系の生活史を発達させてきた原動力でもあった。それゆえに、島田さんはパインの生産から離れてからも、パインの新品種の導入や養成で協力することで地域に貢献してきた。

島田さんにとって、パインとは台湾移民の歴史や台湾人が受けた尊厳毀損の経験を語るものであると同時に、台湾系が石垣島の地域生活の基盤を築き、地域の発展を支えてきたという自尊心が得られるものでもある。島田さんの生活史では、パインが単なる農作物や商品としてあるだけではなく、台湾系としての自己アイデンティティの構成要素であり、歴史的・文化的な自己理解にかかわるものである。

## 第5章 生果パインと農家の社会的承認——パインとは何であるのか

第5章では台湾移民二世である島本哲男さん（1951年生）<sup>しまもとてつお</sup>の生活史を取り上げ、島本さんにとってパインとは何であるかを明らかにしていく。

島本さんは中学3年生のときに父親を交通事故で亡くしたため、高校進学を断念して一からパイン生産を始めた。現在も家族でパイン生産を続けている。島本さんの生活史では、パイン缶詰産業の縮小過程において、1990年代に缶詰用から生果用へ移行するために行なった生活実践に注目する。島本さんは生果用への「価値転換」を早くから見据え、栽培技術の向上に自主的に取り組んできた。島本さんが実践した価値転換とは、反収や量産に準拠した生産ではなく、甘みと酸味のバランスが取れた「おいしさ」の品質に準拠した生産への切り替えである。パインの価値づけに向けて、種苗の優良選抜や窒素の施肥量と施肥期間の調整などの実践を続けてきた。

さらに、パインの価値づけにかんして、島本さんは敵地適作の観点からパインによる土地の価値転換を「土地。土地なんですよ。例えば、サトウキビとかは勝つと思わないほうがいいけど。勝てない。土地がいいですよ。土壌が違うんですよ。石垣島は島のなかで、地域のなかで土壌の質が違うんですよ。だから昔から言うでしょ、適地適作って。そこなんですよ。適地適作なんです。別のものだと絶対ダメだけど、これをつくったらまず負けることはないっていうね。やっぱり土地なんですよ、土なんですよ。」と語る。また、「パインはね、語ればね、かなり多くてね。やっぱりこの地域が一番いいっていうのは、この地区はね、別の作物をつくったら、他の地区に負けるわけですよ。土地がそれだけ貧弱だからね。ところがパインをつくらすと、すごく味がいいわけですよ。だから、まったく同じ栽培を別でやってもできないんですよ。」と、嵩田地区の土壌の貧弱さについて語る。

嵩田地区は、酸性土壌が広く分布するうえ傾斜地が多いため、稲作や野菜、サトウキビに適さない貧弱な土地として長いあいだみなされてきた。その一方で、嵩田地区はパインにとっては最適な土地である。島本さんにとって、嵩田の土地でパインをつくるということは、付加価値のあるパインをつくることができるということにくわえ、地域のなかで「一番いい」パインをつくり続ける意味が生成されるのである。

以前は、農協やほかの農家から受け入れられなかった島本さんの生果用への価値転換であったが、島本さんの栽培技術や優良選抜の種苗「島本一号」も農家と共有され、島本さんが生産するパインも高く評価されるようになった。現在では、地域共同体からの社会的承認を獲得して自己評価を達成するに至っている。台湾移民二世の島本さんにとって、パインは台湾系としての自己アイデンティティを形成・維持するものであるが、それ以上に地域共同体からパイン農家としての能力や業績が評価されるものであり、パイン農家としての自己アイデンティティや社会的な存在価値が確信できるものである。

## 第6章 「へんなパイン」の社会的承認——パインとは何であるのか

第6章では、宮古島をルーツとする平安名貞市さん（1960年生）<sup>へいあんなさだいち</sup>さんの生活史から、平安名さんにとってパインとは何であるのかを明らかにする。

平安名さんの父親は宮古島出身で、戦後に自由移民として石垣島に渡ってきた。それから名蔵・嵩田地区で缶詰用のパイン生産を始め、少しずつ耕作面積を拡大していった。父親が一か

ら築いた地盤を、長男である平安名さんが受け継ぎ、農業を続けている。現在では、名蔵・嵩田地区でパインの生産規模が最も大きい農家である。しかし、平安名さんは農家のなかでも変わり者や浮いた存在として見られてきた。その一つの出来事として、生果としてパインを生産するにあたって「あんなおいしくないパインと自分のが一緒にされたくない」と、農協(当時)のパイン生産部会を退会したことがあげられる。

平安名さんが「一緒にされたくない」理由の一つは、パインの熟度問題であった。缶詰用に生産されたパインや外国産パインと変わらない「青切り」パインを生産することに、平安名さんは疑問を感じていた。「青切り」パインとは、熟度が上がる前に収穫した青(緑)色をしたパインのことである。追熟型のバナナとは異なり、非追熟型のパインは収穫後に樹での成熟と同じように成熟現象は起こらない。そのため、パインは熟度をあげてから収穫することになる。ただし、農家のあいだで「しまり」パインと呼ばれる過熟果や完熟状態に近いパインは、その分だけ腐りやすくなってしまふ。こうした熟度が高い状態のパインは、収穫後の出荷や販売の扱いをいっそう難しくさせる。それゆえに、農協では輸送期間やそのコストを考慮して、パインは「青い」段階で収穫され、出荷は冷蔵コンテナで船輸送されていた。もちろん、農協のなかでも出荷規格は設けられていたが、一部の農家がどんなに品質を向上させて熟度の高いパインをつくろうと、共選システムでは「青切り」パインと同等に扱われてしまっていた。当時は、地域共同体的中心的役割を果たしていた農協の存在は大きく、平安名さんのパイン生産部会の退会は周囲から批判を浴びた。平安名さんがスーパーマーケットで地道に営業をする姿を見た農家は、それを見て笑っていた。

どん底の時期に、現在の契約・取引先である有限会社真南風(那覇市)から、地域の農家をまとめて、パインを卸してほしいという依頼があった。真南風は、農業に頼らないで環境を共生する農業を守ることが島の生態系の回復につながるという理念のもとに、1995年に設立された沖縄の食品卸売会社である。平安名さんは真南風の依頼を受け入れ、農協のなかから名蔵・嵩田地区の一部の農家(宮古系と台湾系の移民二世)を誘い、生産出荷組合「石垣島パイン生果組合名蔵」を組織した。平安名さんが「加工用と生果用では栽培方法がまったく違って、最初は大変だった」というように、缶詰用として原料生産していたときの栽培指針を見直した。

『本物』のおいしさを消費者に届けたいという思いから、パインの特性を活かせるよう圃場条件の選定や肥培管理などを徹底し、農家のあいだで栽培方法の統一を図った。さらに、同じ地区のなかでも圃場単位で土壌の水はけや粘質、有機物含量や養分が違ってくるため、パインの品種に適した土壌の性質を選び取ることも試みた。

このように名蔵・嵩田地区の少数先鋭の農家とともに品質の高いパイン生産を続けてきたことで、地域共同体からも「石垣島パイン生果組合名蔵」や完熟パインが認められるようになり、社会的価値評価を得るようになった。その後、「石垣島パイン生果組合名蔵」は農林水産省生産局長賞(平成26年)を受賞するまでになった。平安名さんにとってパインとは、地域共同体からの社会的承認によって自己評価が得られるものであると同時に、地域にたいして社会的承認を与えていく相互的な関係を体現するものであった。

近年では、平安名さんは生産したパインを「へんなパイン」という惹句で出荷・販売するようになった。通常、「平安名」は「へいあんな」と読むが、<sup>ウチナーグチ</sup>沖繩口では「へんな」と言うこと、また平安名さんが「変わり者」(自称へんなおじさん)であることから、「へんなパイン」のネーミングが付けられた。さらに、平安名さんが「パインで平安名はここまで大きくなった」と

パインへの感謝や愛着を語るように、平安名家のお墓にパインの絵柄を彫ったり、パイン畑の前に「へんなパイン」の看板を建てたりするなど、パインで自己を表すようになっている。それは、父親が宮古島から石垣島へ移住し、パインによって家族が生活していただけでなく、パインによって地域共同体から認められるようになり、<sup>へんな</sup>平安名が地域に根付くことができたからである。また、平安名さんはパインをつくり続けてきたことで、切磋琢磨できる農家や卸売会社、販売会社の人びとと出会えただけでなく、個人の顧客や消費者と出会うことができたように、パインは新しい人間関係や社会的な世界を広げてくれたものであった。それゆえに、平安名さんにとってパインは自己理解にかかわるものであり、個性を形成するものとしてある。

## 第7章 環境世界の創造——自己アイデンティティと「少数者の共同性」

第7章では、各章の論点を整理したうえで、沖縄・石垣島の移民二世にとってパインとはいったい何であるのかという問いにたいする結論を導き出していく。第4章から第6章で取り上げた移民二世の生活史では、パインが厳しい社会状況や危機的な時期を打破して自立した生活を支える自己アイデンティティであり、自己実現を可能にするものであることが明らかになった。

さらに続けて、パインの社会的相互作用によって形成される「少数者の共同性」を考えていく。島田さんの生活史からは、父親の廖が名蔵一帯に残った台湾人たちに未開拓の原生林への移動を率先して促したことを取り上げた。公民権がなく身分が不安定な台湾人が、地域で自立的に生き抜くために、この移動は必要だった。島田さんも次のように語ったように「市有地を開墾して、市有地を払い下げて、財産権を得れば安泰だっていうこと」を見据えた移動と捉えることができた。原生林への移動を促した廖にとって、この地で自立した生活が送れると見込める作物がパインであった。原生林への移動後に、台湾人たちは嵩田（前身は美和）という集落を築いた。それから嵩田地区では廖を中心にパインの種苗増殖と栽培、缶詰製造を再生し、産業の礎が築かれていくが、こうしたパイン缶詰産業をめぐる台湾ネットワークは、台湾人たちが地域のなかで生活していくために必要な「少数者の共同性」であった。

台湾系の人を中心に築いた嵩田で農業をしてきた島本さんの生活史では、グローバル化による社会変動を受けたパイン缶詰産業の縮小過程において、パイン農家として生き残り、地域農業を発展させるために必要なのは生果用の優良種苗や栽培技術の向上であった。島本さんが、5、6年かけて一人で優良選抜した「島本一号」について「苦労したけど、自分だけ持っていてもいいとは思わない。地域が栄えて、島が潤えば一番ですよ。宮古からも譲ってくれて依頼があったけど断った。あとは、（平安名さんに）災害のときとかに困ったら助けてくれて。お互いさまだろって言ったかな」と語ったように、これはパイン生産の発達から地域共同体や地域農業の原動力に貢献する「少数者の共同性」であった。

また、島本さんから「島本一号」を譲り受けた平安名さんの生活史では、「本物」の「おいしさ」という価値から、価値共同体として「石垣島パイン生果組合名蔵」が組織された。この価値を共有する少数先鋭の農家のあいだでは「少数者の共同性」が築かれた。「石垣島パイン生果組合名蔵」では、国内市場を席卷する安価な外国産パインや、石垣島産パインを包摂する沖縄産パインとの差異化を図っている。その差異化の一つとして、「石垣島パイン生果組合名蔵」では生産されるパインを「へんなパイン」とネーミングしていることがあげられる。「へんなパイン

ン」は、地域の歴史や自然環境から生み出される石垣島産パインを認識させるための戦略であり、今後、石垣島産パインがグローバル市場経済のなかで生き抜くための戦略でもある。

3人の生活史からは、パインをめぐる台湾ネットワークの共同性や栽培の共同性、生産出荷組合の共同性を示してきた。いずれの「少数者の共同性」も、パインの発達から地域を発展させようとしてきた共同性に変わりないと言うことができ、「少数者の共同性」は他者との関係、自然との関係、地域との関係の自覚化を経て社会的な存立性の根拠としてあり、社会生活を成り立たせるものである。このような「少数者の共同性」は、「中心」のシステムや組織に強く規定された共同性ではなく、「周辺」の生活世界から次第に立ち現れるダイナミズムとして捉えられる。本論文では、パインの社会的相互作用によって形成される「少数者の共同性」の複数性から、従来の沖縄研究とは異なる共同性の回路を導き出したといえるだろう。

さらに彼らの生活史では、パインによる土地の価値転換やパインの価値づけの生活実践をとおして、条件不利地域に付された否定的な自然や風土、歴史に対する見方が転換されていた。こうしてパインを育む自然や風土に対して肯定的な意味が紡がれ、パインの好適地としての固有性を放ち、自らが生きる環境世界が創造されていた。パインによって社会的承認を獲得するということは、パインが根ざした環境世界が認められ、環境世界に組み込まれるパインと自己との関係が認められるということでもある。それはパインと密接にかかわる人びとの生活世界の保存や歴史的・文化的な自己理解にもつながることである。このように創造された環境世界では、地域と自己の肯定的な関係を築き、自己の社会的な存在価値を生み出している。

本論文において、社会的承認に環境の視点が必要であると述べてきたのは、社会的承認が無色透明な空間で行われる行為ではなく、環境世界のなかで行われる相互行為であるためであった。環境とは、地域の自然だけでなく、生業や生活、文化、歴史といった有意味な関係が網の目のように連関して構成されている。社会的承認概念の構築を考えるならば、承認の背景ないし根拠となる環境を相手とする視点は必要不可欠であるということになる。環境は社会との地続きにあり、環境は社会を映し出し、社会は環境に適応してそれを変化させるためである。社会の映し鏡である環境を射程に置く環境社会学にとって、社会的承認が理論と実践の両面で単なる抽象的概念や道徳的規範に留まらないためにも、地域の自然や環境世界への視点を加味することは欠かせない。

#### 参考文献（五十音順）

安藤由美, 2013, 「テーマ別研究動向（沖縄）」『社会学評論』64(2): 294-305.

天野正子・桜井厚, 2003, 『「モノと女」の戦後史——身体性・家庭性・社会性を軸に』平凡社.

飯島伸子, 2001, 「環境社会学の成立と発展」飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊編『講座環境社会学1 環境社会学の視点』有斐閣, 1-28.

岩佐俊吉, 1984, 『熱帯の果物誌——作物・食物文化選書 4』古今書院.

小那覇安優, 2000, 「パイナップル」『果樹園芸大百科 17 熱帯特産果樹』農山漁村文化協会, 83-105.

Kaori O'Connor, 2013, *Pineapple: a global history*, Reaktion Books. (=2015, 大久保庸子訳『パイナップルの歴史』原書房.)

岸政彦, 2014, 「沖縄の階層格差と共同性——「安定層」の生活史から」『龍谷大学社会学部紀

- 要』44: 36-47.
- , 2016, 「錯綜する境界線——沖縄の階層とジェンダ」『フォーラム現代社会学』15(0): 63-78.
- 北村嘉恵, 2014, 「パインアップル缶詰から見る台琉日関係史」『境界研究』北海道大学スラブ研究センター内グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成: スラブ・ユーラシアと世界」, (0) : 133-139.
- 関礼子, 1997, 「自然保護運動における『自然』——織田が浜埋立反対運動を通して」『社会学評論』47(4): 461-475.
- , 2003, 「生業活動と『かわりの自然空間』——曖昧で不安定な河川空間をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』105: 57-87.
- , 2018, 「移動の島の歴史的伸長——孤の思想から合衆国・石垣を描く」関礼子・高木恒一編『多層性とダイナミズム——沖縄・石垣島の社会学』東信堂, 3-26.
- 田中重好, 2010, 『地域から生まれる公共性——公共性と共同性の交点』ミルネヴァ書房.
- 鶴見良行, 1982, 『バナナと日本人——フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波書店.
- 中村哲也, 2016a, 「パインアップルの来歴(1)大航海時代から台湾伝播まで」『農業および園芸』91(8): 813-824.
- , 2016b, 「パインアップルの来歴(3)南支南洋のパインアップル産業と南洋華僑」『農業および園芸』91(10): 1029-1044.
- , 2016c, 「パインアップルの来歴(4)ハワイのパインアップル産業と日系移民」『農業および園芸』91(11): 1131-1154.
- 似田貝香門, 2001, 「市民の複数性——今日の生をめぐる〈主体性〉と〈公共性〉」『地域社会学会年報』13: 38-56.
- Habermas Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp. (=1985-87, 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』(上・中・下) 未来社.)
- Honneth Axel, 1992, *Kampf um Anerkennung*, Frankfurt am Main : Suhrkamp (=2003) 2014, 山本啓・直江清隆訳『増補版 承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)
- , 2000, *Das Andere der Gerechtigkeit : Aufsätze zur praktischen Philosophie*, Suhrkamp. (=2005, 加藤泰史・日暮雅夫ほか訳『正義の他者——実践哲学論集』法政大学出版会.)
- 又吉盛清, 1990, 『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房.
- 三木健, 2010, 『「八重山合衆国」の系譜』南山舎.
- Mead, G.H., 1934, *Mind, self & society from the standpoint of a social behaviorist*, Chicago, Ill. : University of Chicago Press. (=1995, 河村望『デューイ＝ミード著作集6 精神・自我・社会』人間の科学新社.)
- 村井吉敬, 1988, 『エビと日本人』岩波書店.
- 八尾祥平, 2018, 「パイン産業にみる旧日本帝国圏を越える移動——ハワイ・台湾・沖縄を中心に——」『白山人類学』(21) : 81-104.
- 山本英治, 2004, 『沖縄と日本国家——国家を照射する〈地域〉』東京大学出版会.
- Uexküll, J. Baron, Kriszat, G., 1934, *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und*

*Menschen*, Julius Springer. (=2005, 日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波書店.)

Latour, B., 1999, *Pandora's hope: essays on the reality of science studies*, La Découverte. (=2007, 川崎勝・平川秀幸訳『科学論の实在——パンドラの希望』産業図書.)

#### 付記

本論文は、2014年-2016年度立教大学大学院社会学研究科「プロジェクト研究 E——地域コミュニティと環境研究」、2015年度立教大学学術推進特別重点資金(大学院学生研究) 課題名「パイナップルの社会史——八重山諸島の「境界」にかんする考察」、2018年度立教大学学術推進特別重点資金(大学院学生研究) 課題名「パイナップルと社会運動——モノ・ヒト・コトが交錯する八重山社会」の成果の一部である。